

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第41回

万葉の川心

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

不尽山を詠める歌(巻第一 三二九番歌)

なまよみの甲斐の国うち寄する駿河の国と

こちごちの国のみ中ゆ出で立てる

不尽の高嶺は天雲もい行きはばかり

飛ぶ鳥も飛びも上らず 燃ゆる火を雪もち消ち

降る雪を火もち消ちつつ

言ひもえず名づけも知らず霊しくもいます神かも

石花の海と名づけてあるも

その山のつつめる海そ

不尽河と人の渡るもその山の水の激ちそ

日の本の大和の国の鎮とも座す神かも

宝とも生れる山かも

駿河なる不尽の高嶺は見れど飽かぬかも



富士川橋より富士山を望む

誰にも一生に一度見てみたい景色、もう一度訪ねたい場所がある。「あなたはその場所はどこですか。」

暑さもだいぶ治まってきた初秋の午後、義母と二人縁側でお茶を飲んでい

た。家族が集まれば滅多に二人きりになることはないが、台所で縁側でふつと話せるこの短い時間が好きだ。幼少時代のやんちゃぶり、女学生の思い出、結婚して銭湯の女将さんになった折りの奮闘話、そして、死のうと思つたほどの苦しみ。今まで知らなかった、連れ合いの幼い頃の話を聞けば、不思議に思つていたことにも合点がいく。何より腹を割つて話してくれる義母の一言ひとことには、子どもにも語り継ぎたい知恵と、女同士だから話せる愚痴と、後を生きる者への励ましが、深い愛情に包まれて心にしみてくる。「行ってみたい場所」の間に、

「ランドマークタワーに登つてみたいねえ。お店が休みの土曜日で、空いている日がいい。千葉まで見渡せるほど美しく晴れた日の景色が見てみたいんだ。」
いうことを聞かない膝をさすりながら、目を輝かせて義母が言った。

歌の詠み人はわからない。が、富士の山の神々しさと美しさを歌い上げて人々が渡る川もこの山に源を発し、沸きかえるほどの水を集めて激しく流れているよ。日輪の輝く大和の国の鎮めとしていらつしやる神なのだ。宝として生まれた山なのだ。駿河の富士の高嶺はいつまで見ても飽きることはないなあ。「この「見る」には、ただ目で見るとはなくて、全身でその力を感じ、言葉をなくし、圧倒され我を忘れて「見ている」感がある。自分の中に泉のように想いは溢れるのだが何も言えない。そんな景色に出合いたくて人は旅をするのだろうか。誰の心にも特別な景色が色あせない写真となつて胸の奥底に仕舞われている。日本の心の風景に山も川も無くしてはならない存在であることは間違いない。それは遠く万葉の頃からずっと変わらないのだとこの歌に寄せて思う。

義母の願いを叶えたいと思案し始めると、察して言った。

「いいんだよ、これは私の夢。いつかね、そんな日がきたら。」

特別なものはお金を出してとか、人のお膳立てとか、無理に手に入れるものじゃないんだと言われた気がした。あの日の川も、未だ見ぬ川も、出合いの日を待ちながら、いつも人の心に流れている。